

歸路

立原正秋



帰路

立原正秋



新潮社

第一章のゴヤに関する文は、昭和四十八年一月号〈旅〉に発表したものを敷衍しました。また、第三章の〈アガメムノン〉の台詞は英文から適当に意識しましたので省略があります。

作者

目次

第一章 春

5

第二章 夏

108

第三章 秋から冬へ

133

第四章 冬のつぎに

226

歸

路

行き行きて歸路に遁い
日を計えて旧居を望む

陶淵明

第一章 春

マドリードからトレドに南下する道の両側は見渡すかぎりの平野で、山と樹木がないせい、春だというのに荒涼としていた。平野のところにどこどこに罌粟畑が点在し、赤や黄や橙色の花が絵具を散らしたように叢っている。罌粟畑といっても罌粟を栽培しているわけではなく、小麦畑に自生している丈の低い罌粟だった。十二年前とすこしも変っていないな、と大類は車窓越しに移り行く風景を眺めた。十二年前の五月と同じく白く乾いた風景だった。小さな村をいくつか通りすぎた。崩れかけた白壁に橙色の屋根瓦の農家が十数軒かたまっている村だった。この風景は昔とまったく変っていないかった。

ある小さな村を通りすぎたとき、右方の平野の向うの空が黒くなってきたと思ったら、強い風とともに黒い雲が走ってきて、烈しい通り雨になった。その村をぬけて十分ほど走った頃、雨はあがり、再び平野がひろがってきた。やがて道は緩やかな登りざかになり、左側に低い丘陵地帯が続いた。そして坂をのぼりきったところで丘陵地帯は切れ、道の左側で安っぽい壺や皿を並べて売っている露店の前を通りすぎたとき、前方の高台にトレドのまちが現れた。あれから十二年

経つのか、と大類は歳月をふりかえてみた。そのときもやはりマドリッドからタクシーでトレドにきた。丘陵地帯が切れたところで目前の高台に忽然とトレドのまちが現れたとき、ヨーロッパの中世をみた気がしたのであった。日本の中世もよく擷めていないのにヨーロッパの中世が見えるはずもなかったし、もちろんそれは知識の上でのヨーロッパの中世だった。十二年前、大類純夫は二十九歳だった。一年たらずのヨーロッパ体験だった。

大類は、いったん入ってしまうと迷路のような坂道が曲りくねって続いているまちなかを避け、まちの北のサンティヤゴ地区にぬけた。右に闘牛場、病院、旅行案内所の建物をみながらマドリッドからきた道をまっすぐ入れるところだった。この辺はトレドのまちでいちばん緑が多く、十二年前彼はこのまちで三日泊ったが、暮方になるといつもこの辺を歩いた。

サン・マルティン橋を渡るのか、と運転手がきいた。いや、左にまがってグレコの家の方に行ってくれ、と大類は答えた。ホテル以外は英語の通じない国だったが、固有名詞をならべれば話は通じた。

サン・マルティン橋のすこし手前で左に折れた。グレコの家のちかくのキリストバル通りに北森新平が借りている家があった。北森の手紙には、金細工の土産品店の二階を借りている、と書いてあった。

アメリカ人の団体観光客がそろそろ歩いている石敷の通りの片側は金細工や皮製品を売る土産品店が並んでいたが、さがす家はすぐわかった。それほど広くもないこのまちを、十二年前に歩きつくしていたので、道はよく憶えていた。

店にはいったら、かなりとしとった小男の爺さんが、イラッシヤイ、と大類をみて言った。北森が教えたのだろう、と大類は苦笑しながら、北森はいるか、ときいた。すると爺さんはびっくりにした表情になり、そばにいる少女に早口のスペイン語でなにか言った。少女が奥にはいって行

き、しばらくして北森が出てきた。

北森は疲れた顔をしていた。

「病気で出したのか」

「そういうわけではありません。おひとりですか」

北森はちよつと通りの方をみた。

「磯子さんはマドリードで待っているよ。京子さんといっしょだ」

「そうですか……」

北森は目を伏せた。

「きみは昼めしはまだか」

「まだです」

「では、グレコの家のちかくのレストランで待っているよ」

「そうですか。すぐ行きます」

北森はなにか救われたような表情になり、奥にひきかえした。

大類は爺さんに礼をのべ、店をでてきた。タクシーの運転手には、レストランに入つて食事をしている、と言つてあつた。

キリストバル通りを戻つてレストランに入つたら、運転手は馬鈴薯のはいったスペイン風オムレツを食べていた。北森に冷たすぎたかな、と考えながら運転手のとなりのテーブルについたら、運転手がフォークとナイフをとめてオムレツの皿を指さしながら、トルティリア・エスパニョーラ、と言つた。口髭をはやした五十歳くらいの男だった。結構だ、と大類は答え、^{なまこ}莚をとりだした。店内は空いており、アメリカ人が三組テーブルについているだけだった。

間もなく北森がつき、二人とも葡萄酒と簡単な一品料理をとつた。

「きみはもったなくなにかとったらどうだ。スペインでは朝食はコーヒー一杯だろう」

大類は北森の疲れた顔をみて言った。

「いや、これでいいです。……こんどはいろいろと申しわけありません」

「僕にあやまることはない」

「ホテルはどちらですか」

「プラザだ」

「プラザですか。そうですか。明日伺います。朝のうちに伺います」

北森は葡萄酒をひとくちのんでからだるそうに言った。

「きみはいまだしか三十五歳のはずだが、数年あわないうちに、ずいぶん老けてしまったようだね」

「そう見えますか」

「自分ではわからんのだろう。ヨーロッパがきみを老けさせてしまったのかね」

「そうかもしれない」

「僕も十二年前にはヨーロッパでさんざ葡萄酒をのんだよ。しかし一年間だけだった。きみは十年はこれをのんでいるね」

大類は壺を持ちあげ北森のグラスにつきながら言った。トレド市の紋章である兜をかぶった騎士像のレットルがはってある赤葡萄酒だった。

「ここでは飲みものはこれしかないんです。水と同じですから。マドリードに行けば日本料理屋があり、日本酒がのめますが、あそこで日本人とあっても仕方がないんです」

「なぜだね」

「わかりません。……四年前、日本に帰ったとき、帰ってきた、という実感がありました。しか

し僕は一年たらずで再びヨーロッパに戻ってきました。なぜ、ときかれても答えようがないんです。……磯子さんには申しわけないことをしたと思っています」

「それは明日磯子さんにあったときに言ってくれ。磯子さんも、三カ月しかいっしょに暮していないので、夫婦の実感がないと言っていたよ。きみと別れることは承知している。しかし、きみは、だまってヨーロッパにきてしまった以上、別れてもよいという女に、きちんとあうべきだ」

「それはそうします。申しわけないと思います」

「外国の女といっしょにいるというきみに、磯子さんは遠慮していたよ。きみがこの前日本に帰ってくる以前からの人か」

「セシルとは、帰国の前のにしにパリで知りあったのです」

「切れなかったわけか」

「結果的にはそうでした。……セシルに会ってくださっても仕方ないですね」

「いっしょにいる人か。会っても仕方ないね。きみは一生ヨーロッパで暮すつもりか」

「わかりません。四年前、帰国したときには、大類さんがおっしゃっていた、ヨーロッパを対象化して眺める視線を具えていたつもりでした」

「つまり、というのは、途中で毀れてきたという意味かね」

「そうかもしれません。もしかしたら、はじめからそんな視線はなかったのかもしれませんが」

「病気だよ。きみだけでなく、パリあたりにたむろしている連中がそうだ。用もないのにパリで何年もごろごろしている。そしてたまに日本に帰ってくるとフランス風を吹かす。自分ではフランス人になったつもりでいるらしい。いま日本でなにが流行っていると思うかね。ヨーロッパ人を主人公にヨーロッパを舞台にした小説ばかり書いている小説家がいるが、たとえばその小説家のエッセー集にヘンリーゼ大通りにて」というのがあり、この本を、女子短大生が小脇にか

かえて歩くのが流行っているんだ。つまり文学が服飾用品になっているんだな。というよりアクセサリーのための文学が必需品になってきている。奇特としか言いようのない文学と読者が現れてきたわけだ。ひとつきくが、きみはなぜ日本の古いまちを画かずにヨーロッパの古いまちを画かねばならんのかね」

「なんといわれても仕方ありません」

「きみを責めているわけではない。いまもいったように、きみもまた奇特な存在だ。とにかく明日マドリードで待っているよ。磯子さんには自分のくちではっきり意志表示をしたまえ。これで帰るよ」

大類はボーイをよび、運転手の分もいっしょに勘定をたのんだ。

「ここは僕がはらいますよ」

「親からの送金で生活している身分じゃないか」

大類は金をはらい、運転手をうながして店をでた。そしてしばらく歩いてから振りかえったら、ガラス窓越しに、葡萄酒の壘を前にしてぼんやりすわっている北森の横顔がみえた。

ローマ時代以前に起源し、ふるい時代にはスペインの首都であったこのトレドは、町そのものが史跡であり美術館であった。その意味でこのまちにはヨーロッパの中世がそのまま残っていた。トレドにかぎらず、サラゴサ、セゴビア、サラマンカとスペインのいたるところがそうであり、またヨーロッパのいたるところにそんなまちがあった。大類にしても、はじめからそんなヨーロッパ全体を対象化して眺めることが出来たわけではない。ある時期に格闘を経てそこを通りぬけてきたが、いまも解らない部分の方が多かった。

トレドとマドリード間の距離は約七十キロメートルあり、車が殆ど通っていないので片道一時間ちょっとだった。

マドリードのホテルに戻ったら四時を過ぎていた。フロントで部屋の鍵をもらい、六階の部屋に上がった。部屋はスペイン広場に面しており、このあたりはマドリードのなかでも高層ビルディングが建ちならんでいる。そして窓の下には、西から東にホセ・アントニオ通りがシベレス広場に抜けている。この辺も十二年前と変っていないかった。

大類は背広を脱ぎスウェーターに着がえ、レインコートを上からかけてベッドにごろつと横になった。磯子と京子は夕方でないに戻らないだろう。朝、スペイン広場のそばにある旅行案内所からマドリード市街地図をもらってきて二人に渡し、見物する個所をいくつか教えてやったが、日いっぱい見物してくるはずだった。

葡萄酒はまだ壘に三分の一ほど残っており、北森はそれをちびりちびりのみながら、明日マドリードで磯子に会うことを考えた。磯子と結婚したのは、あれは魔がさしたとしか言いようがないのだ、と彼は結婚をふりかえるたびに自分に言いきかせた。四年前、パリから帰国したのは三月だった。そして五月に、それまでヨーロッパで描きためた絵の展覧会を開いた。六年間のヨーロッパ生活で四十二点の絵が仕あがっていた。六年のうち、最初の一年と最後の一年をパリで過ごし、中の四年はスペイン、ギリシア、イタリアを転転としたが、なかでもスペインがながく、サラゴサ、トレドに二年暮してきた。そして自分なりにヨーロッパを対象化してきたつもりだった。セシルと知りあったのは、大類にも言ったようにパリでだった。展覧会の結果は、美術雑誌も新聞の批評も新人にたいして好意的だった。四十二点のうち三十四点が売れたことも彼の氣をよくした。

北森は葡萄酒を空け、レストランをでた。そして、大類が帰って行った方の道をぶらぶら歩き、

サンタ・マリア・ラ・ブランカ教会のそばをぬけてサン・マルティン橋のところにでた。橋を渡り、タホ川に沿って左の高台にトレドのまちを見ながらゆっくり歩いた。高台のまちの方に彎曲しているタホ川に沿って陸軍士官学校の麓のアルカンタラ橋につき、橋を渡って坂道を昔の王宮の前にでてキリストバル通りに戻ると、一時間すこしかかる。彼は散歩によくこの道順をとった。途中、サン・マルティン橋とアルカンタラ橋のほぼ中間に居酒屋が一軒あり、そこで豚の足をかじりながら安い葡萄酒を一本空ける日もあった。アルカンタラ橋を渡らずにいますこし行くと古いアルカンタラ橋があり、橋のすぐ右にある坂道を登ると、古いサン・セルバンド城の前にでる。城の左方に陸軍士官学校の建物が見える。彼は城のある丘からトレドのまちを眺める日もあった。まちの北側のサンティヤゴ地区に緑はあったが、石で積みあげられたまち全体は、日本人の心にはやはり乾いて見えた。ときたま、たまたまなく日本が恋しくなる日があったが、帰る気持はおきなかった。城のあるところからもうすこし丘を登ると、トレドのまち全体が見おろせる。まちの北方にはオリブ畑がひろがっていたが、日本人の目にそれは緑には映らなかった。

北森はサン・セルバンド城の横の草地に腰をおろして苜をつけた。タホ川の向うの高台に王宮が見える。

磯子を紹介してくれたのは大類で、展覧会の初日の招待会の席だった。

「このひとは西永磯子さんといって茶をやっているが、僕の骨董の弟子でね、今日はたまたま僕の店に見えたのでつれてきた。紹介しておくよ」

と大類が引きあわせてくれたのであった。

魔がさした、といつても、あのときはたしかに日本がみえた……。タホ川はアルカンタラ橋からサン・マルティン橋の方にゆっくり流れていた。この川はやがて西のポルトガル領にはいり、リスボン港に注いでいる。ここから流れの速さはわからないが、古いアルカンタラ橋と新しいア

ルカンタラ橋のあいだに堰^{せき}があり、そこから落ちてゐる水の飛沫で上流と下流が見わけられた。感じのよいお嬢さんだ、と会場にきていた北森の両親がすっかり氣にいつてしまったのがきつかけだった。あれはあの堰のようなものだったのだろう、と磯子と結婚したときの前後を振りかえつてみたが、すでに模糊としていた。磯子の姿も遠くに霞んでいた。

荳を喫み終えてたちあがつた。

坂道をくだり、古いアルカンタラ橋の前にでた。右の道を行つて右に曲ると鉄道の駅にでられる。北森は橋の手前でたちどまり、右の道の方を見た。明日マドリードに行くならこの道を駅に向つて歩かねばならなかった。

大類が電話でおこされたのは七時だった。京子からだつた。一時間前に帰つてきてひとやすみしたところだ、と言つていた。

「僕はひとねむりしたところですよ」

「あら、おこしてしまつたのかしら」

「いや。睡りすぎてしまつたところだつた。いっぱい見物しましたか」

「いろいろと。あとで話すわ。磯子さんが日本茶を持っていられただけ、のめる方法はないかしら」

「日本茶か。では、二人ともこっちにいらっしゃい」

電話をきり、大類は洗面所にはいつて顔をあらつた。

やがてとなりの部屋から磯子と京子がきた。

「お昼はなにをあがつたのかね」

「今朝大類さんに教えて戴いたお店に行き、パエラをとりましたの。二人で食べきれなかったわ。でも、もう、おなかは空いてきたけど」

京子はパエラの海老や貝のおいしかったことを語った。

「とにかく日本茶をのみましょう」

大類は電話でコーヒーポット一杯の湯とコーヒー茶碗三個のルーム・サービスをたのんだ。

「プラド美術館を半分だけ観てから王宮に行き、昼食のあと、ホセ・アントニオ通りを見物しましたの」

「まあ、どこでもよいから異国の風物にふれられればよいわけだ」

大類は京子に答え、それから磯子をみて、北森くんは明日の午前中にここにきます、と知らせた。

「いろいろと有難うございます。お仕事でいらっしゃる旅にお願いしてついでにただけでなく、そんなことまでお願いしまして」

「いや、仕事といってもたいした仕事ではない。北森くんに紹介した責任があるからね。それより、お二人とも、夕食はなにがよいかな」

「七時でまだ昼のあかるさだから、夕方の実感がないわ」

京子が窓の方をみた。

「九時半頃から夕食の時間だが、居酒屋ならもつとはやくからやっていますよ」

「居酒屋がいいわ。磯子さん、どうかしら」

「いいわよ」

「では、居酒屋を梯子酒と行きましょう」

このときドアが叩かれ、磯子があけにたった。ボーイだった。若いボーイで、失礼な質問をす